



うぐいすの石笛

【その3】

作:近藤せいけん



うぐいすの石笛 その三

三日後、早朝、若者は厚木の飯山温泉（いいやまおんせん）に向かった。

小鮎川にかかる、赤橋を渡り、薄い霧が川面に立つ川沿いを、歩いた。まだ、人通りはなく、静かな、落ち着いた、散策路であった。

立ち止まり、石笛を取り出した。口にあて、吹き始めた。

「ホーホケキョ ケキョケ ケキョ ケキョ」

心に澄み通り、揺さぶられる、美しい音色が、小鮎川（こあゆがわ）川面の上、飯山の森に流れた。

誰かが、近づいて来た。

山高帽をかぶった、背の高い紳士であった。

聞きほれていた。

「君が吹いているのか～」

「驚いた、こんなに美しい、うぐいすの音色は、生まれて初めて聞いた」

「すばらしい、心に澄み通り、揺さぶられる」

若者は石笛を吹くのを止め、背の高い、人を見上げた。

「君は誰かね、どこに住んでいるのか・・・」

若者は初めて、名前を名乗った。

「この近くの、清川村（きよかわむら）に住む、熊坂 一（くまさか はじめ）といいます」

「ほう～、はじめ君。どうして、こんな美しい、うぐいすの音色を吹けるのかね？」

「まるで、天使のお使いのようだ」 「すばらしい、感激した」

「もう一度、吹いてくれたまえ、ぜひ、聞きたい。お願いします」

はじめは、石笛を口にあて、吹き始めた。

「ホーホケキョ ケキョケ ケキョ ケキョ」 「ホーホケキョ ケキョケ ケキョ ケキョ」

何回も繰り返した。

春の青空に、高く舞い上がり、そして、広がってゆく、聞く者を魅了し、心に澄み通り、心を揺さぶってゆく。

山高帽をかぶった、背の高い男は感激にしたっていた。

「すばらし、本当のすばらしい。この世のものとは思えない」

「実は、昨晚、旅館で、夢を見た。」 「うぐいすが、ホーホケキョ ケキョケ ケキョ ケキョと美しい音色で、鳴く夢だ」

「夢ではなかった。正夢であった」

はじめが、山高帽をかぶった、背の高い男に、

「私は、あなたが、ここを散策する事を知っていました」「ここで、この石笛を吹き、あなたが来るのを待っていました」

「そうか・・・そうだろう。夢のとおりだ。私も何か、解からないが、大きな力で促されているような、気がしていた」

「はじめ君、私に出来ることであれば、力になりましょう」

「もうし遅れましたが、陣名 隼人（じんない はやと）といます」

「そして、はじめ君、君の望はなんですか・・・」

はじめは自分の今、置かれている、状況、そして、清川の父の工場で、ふるさとで仕事をしたい事など、話しをした。陣名 隼人（じんない はやと）と、名のった紳士は、熱心に聞いていた。そして、工場の仕事の内容、大学での専門内容など、二、三、質問をし、うなづいたり、していた。

陣名は天が、彼を引き合わせたものと、この青年に運命的なものを感じていた。

その時、背広姿の人が早足で、近づいて来た。

「先生。先生。こちらに、いらしやったのですか・・・」

「うぐいすの、美しい鳴き声が、聞こえましたが・・・」

「ほ～う、いいところにきた。今この青年と出会ったところだ。この青年の希望を聞いた。かなえてあげたいと思う。」

「君にこの青年を紹介する」

「この近くの、清川村に住む、熊坂 一（くまさか はじめ）君だ。宜しく頼むよ」

「はい、初めまして、村木 真也（むらき しんや）です。宜しく願いいたします」

「村木君はうちの研究所では、若いが、主任研究員で、博士号を持っている優秀な人です」

「はい、私は工学研究所で主に、未来科学、ナノ科学を研究しています」

「陣名先生は工学研究所の所長で、未来科学、ナノ科学の世界的権威であります」

はじめは、ただ、ただ、恐縮して、頭を下げた。

「さあ、善は急げ、じゃ。明日、私の研究所を訪ねて来なさい。あなたのお父さんの会社で、手伝ってもらえる、仕事を考えましょう」

「村木君、はじめ君の手助けを頼むよ」 「はい、かしこまりました」

「はじめさん、未来科学、ナノ科学はおもしろい、これから、どんどん発展する、成長分野です」 「一緒にがんばりましょう～」

はじめは、どんな事でも挑戦し、自分の足で力強く歩き出そうと決意した。

手に握っていた、石笛が瞬間、キラッと、光ったのを見ていた。

運命の扉が静かに開かれはじめた。

その時、「ホーホケキョ ケキョケ ケキョ ケキョ」心に澄み通り、揺さぶられる、美しい音色が、小鮎川（こあゆがわ）川面の上、飯山（いいやま）の森に流れた。